
ディアボロは非日常な日常に投げ込まれる！

ごくでヴある

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ディアボロは非凡な日常に投げ込まれる！

【Zコード】

Z7397X

【作者名】

じぐでづある

【あらすじ】

この話には多少ディアボロの大冒険の設定が加えられています。そして原作のディアボロが大好きだ！という方はあまり期待しないで見るかそのままバイツア・ダストしてください。

後、ジョジョの原作キャラは最初にプッチ神父が登場しますが以後登場しません。

ディアボロ以外は出ないと思っていてください。

スタンダードは主に第6部までのスタンダードが出ます（スティール・ボーランを作者が持っていないため）

後、スタンドの解釈が間違っていると気づいたときはぜひとも意見をください！今後の参考にもなります。

・・・注意書きが長くなりましたがあらすじです。

ディアボロは不思議なダンジョンから放り出され、プッチと戦い死んだ。

そして再び死に続けていくのだった。

しかし、再び死に続けたディアボロはあるところに迷い込んだ。

そしていつまで経っても死なないことに不思議に思ったディアボロは回りの捜索に行くのだった。

世界の一巡の終わりと新たな始まり（前書き）

あらすじにも書いたようにこの話には多少ディアボロの大冒険の設定が加えられます。

そして原作のディアボロが大好きだ！という方はあまり期待しないで見るかそのままバイツア・ダストしてください。

後、ジヨジヨの原作キャラは最初にプッチ神父が登場しますが以後登場しません。

ディアボロ以外は出ないとthoughtしてください。

スタンンドは主に第6部までのスタンンドが出ます（スティール・ボーラ・ランを作者が持っていないため）

世界の一巡の終わりと新たな始まり

「・・・今日もまた最後までたどり着けなかつたか」
男はそつそつと部屋の中の布団に寝転んだ。

男の名はディアボロ。

イタリアの元ギャングのボスだ。

彼は、世界を支配できるほどの力を持つていた。
しかし、ジョルノ・ジョバーアーナのG E R ゴールド・エクスペリエンス・レクリエイションによつて永遠に死に続けることになつてしまつた。

その死に続いている中で、ディアボロはとある場所に迷い込んだ。
そこは不思議なダンジョンと呼ばれる無限に迷宮が増えていく場所だ。

ディアボロはそこで永遠に死なくなる願いをかなえるために進んでいた。

結果的には、まだその願いはかなえられてはいない。

しばらくベットに転がっていたディアボロだが空間に何らかの違和感を感じた。

家の中がゆがんで見えているのだ。

「こ、これは！」

ディアボロは咄嗟に近くに置いてある亀を手につかんだ。

「どうやら、世界の一巡が始まつたみたいだね」

すると、この家の中にある露伴がしゃべつた。

彼はいつもこの家の中にいる。

最初、ディアボロはなぜこの男がいるのか不思議に思つていたが自分で精一杯だつたので無視していた。

「世界の一巡？どういうことだ」

ディアボロは露伴に聞いた。

空間はますますゆがんでいるので時間がないように思えた。

「世界は一度滅んだ。そして今は、新たな世界が構築されようとして

「……この、G E Rの作った空間が壊れようとしているのも新しい世界ができる何らかの力が及んでいるからだろうね」

ディアボロはその言葉を聞いて睡然とした。

このダンジョンにはDISCと呼ばれるスタンド能力が封じられた物が落ちていた。

ディアボロはそれらも集めていた。

自らを守るために。

ディアボロはこのダンジョンを制覇すれば死に続けないと思つていた。

いや、そう思わないと自分の心がもちそうになかったのだ。

それなのに……この世界すらもジョルノ・ジョバーアーナのG E Rのまやかしにすぎなかつた。

「何だと……それでは、俺は結局……ジョルノ・ジョバーアーナの手のひらの上で踊つていたにすぎなかつたというのかああああああああ！」

消え行く空間の中で、ディアボロの悲痛な叫びが響いた。

そしてそれは、ディアボロの中で大きな亀裂を作ろうとしていた。

しかし、亀裂はできなかつた。

「それは違うよ、この世界を作つて君をここに呼んだのはG E Rだ。

けど、これまでしてきたことはすべて君がしたことなんだよ。そしてそれはこの空間がなくなつた先でとても役に立つ」

露伴が言つたその言葉でディアボロの心が折れることは無かつた。

そして、ディアボロは露伴の顔を見た後崩れた空間の中に落ちていつた。

「ディアボロ、君に頼みたいことがある。プッチのスタンド、メイド・イン・ヘブンを倒してくれ」

気がつくと、ディアボロは刑務所の中にいた。
どうやら階段のところらしい。

ディアボロは念のためにメタリカ、ザ・ワールド、ホワイト・アルバム。

そして、元からあるキング・クリムゾンを頭に入れた。
ディアボロはメタリカで見えなくした。

さらにキング・クリムゾンのエピタフで近い未来を見た。
そこには・・・少年が妙なスタンドを持った男に襲われているのが
見えた。

そのスタンドはディアボロが見たことの無いスタンドだった。
正直戦わなくてもいいだろう。

だが・・・

「たとえこれがジョルノ・ジョバーアーナの策略でも、俺は岸部露伴
に頼まれた。だつたら、するまでだ」

次の瞬間、予知で見た少年が出てきた。

そしてその少年はディアボロのいるほうに走ってきた。

だが、その少年は靴を踏みその棒が顔面に当たった。

そして飛んでいつて壁に吸い込まれた。

いや、壁の隙間に入つたというべきか。

そして、予知で見た黒人で神父の服装をした男・・・ブッヂが走つ
てきた。

ディアボロはタイミングをまつた。

「（自分に最も近い距離まで・・・3、2、1・・・いまだ！）」

ディアボロは背後からキングクリムゾンを出してブッヂのスタンド
を殴りつけた。

・・・はずだつた。

だが、その攻撃はあたることはなかつた。

「な・・・なんだとッ！？」

ディアボロはすぐにエピタフを使った。

すると、そこには高速で動いているプッチの姿が見えた。

「これは・・・時を加速させているのか？」

そう考えたディアボロは再びタイミングを待った。

そして襲つてくる瞬間！

「世界！」

時を止めた。

ディアボロは今の隙を使って世界ザ・ワールドで

『無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄あーーー』

プッチの体にラッシュを当てる。

プッチの体は少し後ろに下がつて動きを止めた。

3秒経過

「！ダンジョンのときよりも力が。・・・だが、終わりだ！」

そして、世界ザ・ワールドの拳がプッチの腹部を貫いた。

そのときに、時は動き出した。

「ぐはっ！？ば、馬鹿な・・・複数のスタンンドを所有しているなど・・・だが、終わるなら道連れだ！」

ディアボロは間に合わなかつた。

もはや、キング・クリムゾンやホワイト・アルバムを使つ暇などえられなかつたからだ。

最終的に、ディアボロはプッチのスタンドメイド・イン・ヘブンの超加速した腕の攻撃を受けてその場に倒れた。

ディアボロは、最後に意識を失う前にホワイト・スネークのDISCをホワイト・アルバムのDISCと差し替えてホワイト・スネークを使った。

すると、プッチの体からメイド・イン・ヘブンのDISCが出てきた。

そのDISCを龜の中にしまつとディアボロは、そのまま死んでしまった。

そしてディアボロは世界の一巡が無効になつたあとも死に続けることとなる。

だが、ディアボロは知らない。

再び死に続けたその先で、何が起くるかということを。

世界の一巡の終わりと新たな始まり（後書き）

ディアボロの性格がやわらかくなつているのは死に続けた体験をしてさらに不思議なダンジョンでも死に続けてその間に自分のことを客観的に見れるようになつて自分が最低な人間だったことに気づいたからです。

ちなみに今後のディアボロの目標は G E R の能力から開放され平凡に暮らすことです。
ゴールド・エクスペリエンス・レイクイエム

・・・吉良吉影と同じ考え方になりましたね。

ディアボロ、死す！？

幻想郷、それは人間と妖怪が共存して暮らす楽園。

幻想郷には忘れ去られたものが流れ着く、忘れ去られた場所なのである。

そんな幻想郷には、外来人と呼ばれる外から流れ着く者たちがいる。だが、外来人はたまたま流れ着いただけの者が多い。なぜなら、人間が忘れ去られることなど無いに等しいからだ。

「はっ！？次は、次はどこから襲つてくる…？」

ディアボロは咄嗟に周りを見渡した。

周りをみると木がたくさんあることから森の中といふことがわかつた。

ディアボロはそれを知るとさもざまな死に方を想像した。

熊に襲われて再起不能、木が倒れてきて再起不能、蛇に襲われて再起不能、毒キノコを食べて再起不能、絶望の番人に襲われ再起不能などさもざまなことを。

しかし、それらはディアボロにとつてすべて経験した死に方だ。

実はディアボロの死に方にはある特性がある。

それは、一度死んだ死に方では死がないということだ。

だが、それは角度、攻撃、時間などがかさならなかつたらの話だ。

しかし、ディアボロはすでに地球上の生命の数以上は死に続いている。

つまり、その数だけもう死ぬことは無いということだ。

だが、死に方にはさもざまなものがある。

だからディアボロは今も死に続いているのである。

ディアボロは落ち着くために深呼吸をすると地面に寝転がつた。

いつ死んでもいいように気持ちを落ち着かせているのだ。

・・・だが、十分経つてもディアボロは死なかつた。

おかしい、ディアボロはそう思つた。

いつもならこのころにはもう死んでいるはずなのだ。

ディアボロは、地面に寝転がるのをやめて立ち上がつた。

「・・・周りを探索してみるか」

探索していたらそのうち死ぬだろ？、ディアボロはそう思つた。

ディアボロは森の中を探索し始めた。

それと同時に、ディアボロは久々にスタンドを出してみた。

「・・・キング・クリムゾン！」

すると背後からディアボロ自身のスタンドであるキング・クリムゾンが出てきた。

そして、ディアボロはHピタフで未来を見た。

だが・・・それでディアボロはあることに気がついた。

「なに・・・」

それは、Hピタフが未来予知した未来が3・4秒後のものだつたと
いうことだ。

ディアボロのスタンドであるHピタフは通常十数秒後ほどの未来を見
えることができる。

それがたつた数秒後の未来しか見えないといつ」とは。

「スタンドが・・・弱体化しているだと」

ディアボロはその事態を知るとある過程が浮かんだ。

スタンドとは、いわば精神が具現化したもの。

つまり精神が変化したらその分スタンドが強化されたり弱体化した
りする。

「・・・まさか、俺の精神がダンジョンにいたときより衰えたとい
うのか・・・」

ディアボロは、ダンジョンから放り出されてブッヂと戦つて死んだ
後から再び死に続けていた。

その死に続けている中で、スタンドや記憶のDISCをしまつてい

る亀はどこかに行ってしまった。

ゴーリック・ハクスピリエンス・レクイエム

あの亀は「ディアボロのよそうだとGERによって生み出されたものだろうから滅びる」とは無いと考えた「ディアボロはいつか死ななくなつたら探し出さう」と思つていた。

しかし、それが後のある事態を引き起すこととなる。

「ディアボロが歩いていると、さまざま花が咲いた花畠に着いた。

「花か。・・・だが、こここの花は手入れされていることから自然に生まれたものではないようだな。近くに人でも住んでいるのか？」

「ディアボロはまずはここに住んでいる人から話を聞こうと思つた。

だが、次の瞬間エピタフの数秒後の未来予知を見た「ディアボロは咄嗟にキング・クリムゾンを出し、

「キング・クリムゾン！」

キング・クリムゾンのスタンド能力を使用した。

「ディアボロのスタンドのキング・クリムゾンは時を吹き飛ばす力を持つている。

だが、今のディアボロでは五秒が限界というところだろう。

「ディアボロはキング・クリムゾンの能力を使うと背後を見た。

そこには、傘を「ディアボロに刺そうとしている女性の姿が見えた。

ディアボロは時の吹き飛ばしている空間で女性から距離を取つた。

「時は再始動する」

すると、ディアボロの後ろに立つていた女性は驚いていた。

傘を突き刺したはずのディアボロが自分の後ろに立つていたからだ。

「・・・あなた、何者」

女性はそう言つてディアボロの方に振り向いた。

ディアボロは冷や汗を流した。

このような経験はギャングをしていたときでもあまり無かつたことだ。

「ディアボロはそのとき、戦うという思いより生まれたのは・・・逃げるという思いだけだった。

「ディアボロは無意識のうちに彼女に背を向けて走り出した。

しかし、相手も逃がす気はまったく無いようだ。

彼女は「ディアボロを追ってきた。

「くつ・・・早すぎる、やつは人間なのか？」

このとき「ディアボロはまだ知らない。

相手が妖怪であるということだが。

しかも、その妖怪の中でもトップクラスの力を秘めているということを。

そして、このとき直感的に「ディアボロはこう思った。

ああ・・・死亡フラグが立つてしまったな

次の瞬間、ディアボロの体が女性の放たれた光線によつて消し炭になつた。

ディアボロ、女性の放つた光線に焼かれ消し炭になり再起不能

ディアボロ、死す！？（後書き）

題名からしてネタばれすぎる。

もちろん狙つてやりましたよ。

ディアボロは死んでしまった。

このままこの作品も終わってしまう・・・わけないです。

次回も続きますよ。

デイアボロ、蘇る！

ディアボロ、再起不能

再起不能？

ディアボロ、再起可能

突如、さへ毛糸にされたティアポロが空から落ちてきた。

さつき消したはずの男がこの場に空から落ちてきたからだ。

今までは死んだらすぐまたまたたく別の場所に出現した。

「どうしたことだ……だが、今はそんな考え方をしている暇は

なやめいた」「

さつきの女性が傘を持つたままディアボロに近づいてきていた。
ディアボロは数秒前にエピタフで見ていたから簡単に回避する」と
ができる。

「アーヴィングの『アーヴィング』、イーベンの『イーベン』、

「（ぐつ、あの傘本当に傘か？）キング・クリムゾン！」

ディアボロはキング・クリムゾンを発動した。

そして、幽香の背後に回り、むと手のひらから出でている血を幽香の目にかけた。

「俺の体から出でている血はもう俺の体ではなく、物体だ！そしてく

たばれ！」

ディアボロはキング・クリムゾンの手で女性に打撃を加えた。いくら女性とはいえ、一度でも自分を殺したのなら迷い必要は無かつた。

だが、打撃を加えた後、ディアボロは驚いた。

いくら現時点でスタンドとしての力のレベルがBからCの間だとしても、人間を手刀でアジの開きのようにするのは簡単な話だ。

だが、女性は打撃を加えた肩から多少血が出る程度だった。

「（馬鹿な！？弱体化していてもこのキング・クリムゾンの力に耐えるとは・・・まさか、こいつスタンド使いか？いや、だがこの世界にいると決め付けるのはまだ早い）・・・ちつ、時は再始動する現時点のキングクリムゾンの起動時間の五秒が経つて時は再び正常に動き出した。

女性はいきなり方に衝撃が走ったことに驚いた。

ディアボロは三十秒程度間をおかないともう一度時を吹き飛ばせないことに気づいていた。

だから、ディアボロはそのままキング・クリムゾンで女性に殴りかかつた。

完全に止めを刺すために頭を狙つて。

しかし、女性はキング・クリムゾンの腕を見た（・・・）。

そして、次の瞬間女性の体からディアボロには見覚えがある・・・スタンドが出てきた。

「何・・・だと！？」

女性の背後から出てきたスタンド。

それは、ゴールド・エクスペリエンスGEだつた。

ゴールド・エクスペリエンスはキング・クリムゾンの攻撃が当たる前に、

『無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄』

ラッシュを仕掛けてきた。

ディアボロは咄嗟にキング・クリムゾンの腕を自分の前にクロスさ

せてガードした。

しかし、ゴールド・エクスペリエンスの力がことしても車を吹き飛ばすぐらいはできるのだから、当然ディアボロはラッシュの勢いで吹き飛ばされて木にぶつかった。

「ぐはっ・・・なぜ、やつがゴールド・エクスペリエンス。ジョルノのスタンドを」

そのとき、ディアボロはある可能性が一つ浮かんだ。

そう、それはディアボロが不思議のダンジョンで集めたスタンドのDISCだった。

「（まさか！・・・いや、それしか考えられない。・・・試してみるか）」

ディアボロは背後からキンギング・クリムゾンを再び出した。女性は傘を地面に突き刺すと、そのままゴールド・エクスペリエンスを出した状態で向かい合つた。

二人が考えていることは同じだった。

スタンドで頭を叩く。

そして、二人は同時に動いた。

そして、

『無駄無駄無駄無駄無駄無駄！』

ゴールド・エクスペリエンスが先に動いた。

しかし、ディアボロの方は予想外の行動に出た。

「！・・・常人がやることじゃない」

なんと、殴りかかった右拳が届かないと知るとその右拳の勢いを消さないまま右腕を手刀で切つた（・・・）。

とうぜん、本体にもそのダメージがくる。

ディアボロの右腕はちぎれて地面に落ちた。

「ぐつ！」

だが、ゴールド・エクスペリエンスの拳より先に切り取つた拳が女性の頭に当たつた。

そして、その衝撃で女性の頭からスタンドのDISCが出てきた。

女性は突如スタンドが消えたのを見て攻撃をやめた。
ディアボロはそれを見て疑問に思った。

「なぜ、無防備な状態の自分を殺さなかつたのか？」と。

「ふう〜、どうやら勝負は私の負けのようね」

女性はそう言うと地面に落ちているゴーレド・エクスペリエンスのDISCを投げ渡した。

ディアボロは残つてゐる左腕でそれをつかんだ。

それに触つたとき、ディアボロはやはりと思った。

「（このDISCは・・俺がダンジョンで取つたものだ）・・・なぜ攻撃するのをやめた？」

ディアボロはそういうながら左手でDISCを自分の頭に差し込んだ。

女性の方は平然とこう答えた。

「それが、今のルールだからよ」

ディアボロはそれを聞くと疑問に思った。

ルールとは一体と。

「ルールとはどういうことだ。それに、なぜお前がDISCを」
女性はスタンドのことを詳しく知つてゐるディアボロに驚いた。
そして、今の状態について話すこととした。

「・・・この土地、幻想郷である日妙な円盤が現れたの。そして、
それは力のあるものが触れたら・・・勝手に体の中に入つていつた。
種族関係無しにね」

ディアボロはその話を聞くとスタンドの矢のことを思い出した。
スタンドの矢、それはスタンド能力を引き出す矢のことだ。

ディアボロはその矢を見つけた第一発見者だ。

その矢のことはそこらのやつよりは知つてゐるつもりだ。

そして、その矢自体がさす相手を選ぼうとすることもあるといつこ
とも知つてゐる。

その話を聞くと、ディアボロはまるでDISCが相手を・・・入る
相手を選んだかのように思えた。

「その事態の深刻さに気づいたハ雲紫は、あることを提案した。それは、・・・戦つてその円盤を奪い取るということ」

ディアボロはそれを聞くと驚いた。

自分の知らない見知らぬ土地で、このよつなじが起きていたことに。

「おそらく、全部の円盤を奪つたやつからハ雲紫が全部奪い予定だつたんでしょうが。まあ、おそらくそれが幻想郷に被害をもたらすものだとハ雲紫が認識して起こしたんでしょうけどね」

ディアボロはまだ幻想郷のことを知らない。

ゆえに女性が言っていることは半分も理解できなかつた。

だが、わざわざそんな大掛かりのことをするということはかなりの数のDISCがばら撒かれてしまつたのだろうと理解した。

「・・・あなた、もしかしたら何か詳しいことを知つてゐるの?それにはあなたの体を消し飛ばしたときあの円盤は出てこなかつた。・・・どういふことなの?」

ディアボロは、話そつか否か迷つた。

だが、目の前の女性はDISCの詳しいことはおろかスタンダードの定理すら知らないようだ。

だが、次の一言で自分が話さないといつ考えはないことを知つた。

「言わないあなたを殺すわよ」

そう笑顔でいわれたら答えるおえない。

いくら死に続けてきたとはいえディアボロは人間だ、死ぬのは怖い。自分の防衛本能には逆らえず、ディアボロはスタンダードとDISCのことを話した。

もちろん、不思議なダンジョンのこととGERのことは伏せて。ゴーレム・ハクスペリエンス・レクイエム

「ふうん、そう。・・・私は風見幽香、あなたの名前は」

別にあまり興味を持つた様子をしなかつた幽香はディアボロに名前を聞いた。

「ああ、俺の名はディアボロ」

ディアボロはそういうながら「ゴーレム・エクスペリエンスのみ(・・・

（）を出して腕を治療している。

正確には近くに落ちてた石で自分の腕の部品を作つてへりつけているだけだが。

幽香はディアボロの話よりはそつちのまつに興味を持つていた。ただし、DHSUがなくなつた幽香はスタンドは見えたことは無い。だが、もちろん部品ができるのは見える。

しかし、そつきの戦いでラッシュしかしなかつたといつゝとは。どうやら「アーランド・エクスペリエンスの本来の能力、生命を与えることを知らなかつたようだ。

「スタンドの説明は聞いたけど、ある意味それは能力持ち（・・・）として分類されるわね」

ディアボロはおそらくスタンドの他にも波紋などもその中にに入るのだろうと思つた。

実際スタンドは一般人からしてみれば超能力のようなものだからだ。「とりあえず、あなたはどうするの？・・・まあ、あなたが言つていたスタンド使いの鉄則でスタンド使いはひかれあつというのがあるらしいからどこかに隠れても意味は無いと思つけど」

ディアボロは考えていた。

今のディアボロの目的は、^{ゴーランド・エクスペリエンス・レイクイード}GERの呪縛から解かれて植物のように平凡に暮らすことだ。

だが、スタンド使いと関わるとことは逆に自分を死のふちに招き平凡な生活から遠のいてしまう。

しかし、スタンド使いはひかれあつから逃げる」とは無理だらう。ならば、

「・・・ならば、俺がスタンドのDHSUをすべて回収して平凡な生活を送る術を探すまでだ！」

ディアボロはそう考えた。

だが、ここで一つの大きな問題がある。

それは、スタンドの強さである。

スタンドは精神力によつて強さが変動する。

だが、今のディアボロは精神力が弱まっている。

つまり今キング・クリムゾンは本気を出せず、ディアボロがダンジョンでできた四つのスタンンドを同時に使うというのも不可能だ。

だが、スタンンドは波紋と同じように使わなければ衰えていく。

「（つまり、死に続いている間は使っていなかつたからかなり弱体化しているわけだからスタンンドと戦い続けることで徐々に回復させていけばいい）」

ディアボロは決心した。

スタンドのDISCを集めて、GERの呪縛からとがれて平凡に暮らすことに専念すると。

「・・・では、またな幽香」

そう言つとディアボロは幽香の花畠から離れていくために歩き出した。

幽香はそんなディアボロを見ていた。

そして、あることに気づく。

「彼、幻想郷の土地知らないみたいだから迷つんじや。それに、彼が言つていたしに続けるということは」

すると、歩いているディアボロが突然倒れた。

幽香はなぜディアボロが倒れたか木になつたので近寄つてみた。すると、ディアボロが歩いていた足元に靴跡のついた糞が落ちていた。

「もしかして・・・ショック死？」

今日のディアボロ、糞を踏んでショック死。

「こんな様子で、大丈夫なのかしら彼は・・・」

幽香はがらにも泣くディアボロの行く先を心配した。

ディアボロ、蘇る！（後書き）

ちょっとした基本設定。

スタンドのDISCでスタンドを使えるようになつてもそのスタンドの力を完璧に使いこなせるという確証は無い。

そもそもスタンドは相性の問題がありその相性が完全に一致するということはかなり低い。

スタンドを（精神力が元に戻つていたら）四つ同時で使えるディアボロでもそのスタンドを完璧には使えない。

スタンドのDISCは頭に強い衝撃を与えると出でくる。

ただし、ディアボロのキング・クリムゾンはディアボロが元々所有しているスタンドのためDISCとして抜けることは無い。

ディアボロの今の精神力では一つのスタンドを同時に使つことは不可能です。

スタンド使いと戦つたびにだんだん経験が積まれて戻つていくという感じです。

しかし・・・」のままではディアボロが最低一話に一回死んでしまう。

それと募集をします。

東方のこんなキャラにこういうスタンドを使って欲しいというのを募集します。

もしかしたら、話の内容に東方キャラがそのスタンドを使うかもしれません。

スタンドは第六部までのスタンドでお願いします。

ディアボロ、スタンドバトルをする

ディアボロは森の中を歩きながら考え方をしていった。幽香が言つには、スタンドバトルは・・・この幻想郷で行われていた弾幕ごっこのように・・・ごっこ遊びとしてしか見られてないらしい。

ただ、弾幕ごっこにスタンドと肉弾戦が加えられたというわけで、スタンドで命がけで闘つてきたディアボロからすれば、それはなまつちよろいとしか思えなかつた。

「まあ、なるべく争いごとにまま着込まれたくないし・・・な！」ディアボロはキング・クリムゾンの裏拳で襲つてきた妖怪の顔面をつぶした。

ちなみにこれはエピタフでの未来予知で見たことである。（ただし6秒後までの未来を見ることができる）

森の中を歩いていると妖怪がたくさん襲つてくる。

だから、スタンドを常時出して戦わないといけないことになつてゐるのだが・・・

「（まだ雑魚ばかりでよかつた。やはり弱体化してるとはいえキング・クリムゾンには勝てないみたいだしな）」

ディアボロが森の中を歩いてあつている妖怪はすべて弱小妖怪ばかりである。

その殆どは人間の形を取つてはいない。

まあ、ディアボロなら人間の形を取つていてもお構い無しだらうが。「俺は平凡な生活を望んでいる・・・それを阻害するものがいるのなら誰であろうと始末する」

何かすごく物騒なことを言つている。

たとえるなら吉良吉影のような考え方をしている。

そんな感じでディアボロが歩いていると変な神社が見えた・・・が無視して先に行くことにした。

「あそこには俺を死に至らしめる魔物が住んでいる気しかしない」

というわけでティアボロは神社には行かずに別のところに行くことにした。

「 とは言つても、幻想郷の土地やある場所については人里程度しか教えてもらつてはいないのでどこに行けばいいかわからないようだが。もちろん、幽香には聞いたらしいが

『そのぐらい自分でどうにかしなさい』

の「一言で描画されたらいい」と

ディアボロはそのまま神社の道として多少整備されているところを歩いている。

せたみは幻想細て力を持ててゐる如きの力半ば空を飛ぶことができ

だが、ディアボロはそれができない。

できたとしてもキング・クリムソンの脚力で飛び上かる程度だろう
それをしても何かしら壁や木などがないと方向転換ができない。
スタンドの中でも自分を浮かせるスタンドは・・・あるにはあるが
正直被害がでかいため使う意味もない。

いはできるのだが・・・

ティアボロがそんな風に考えていると、草が揺れる音がした。すると、草むらから氷のように透き通った羽を生やした少女が現れ

た

「おまえー! さつき変なの出してたなー! もしかしてスタンダ?」

ディアボロは変な羽を生やした少女がスタンドを見えていたことに驚いたがすぐにキング・クリムゾンを出して身構えた。

少女の方も背後から鳥のよくな形をしたスタンドを出してきた。
「あたいはチルノ。闘う前に挨拶するのも礼儀だつて聞いたことあるからいつて見たけど」

ディアボロはスタンドを見ながらそれを聞いていた。

そしてチルノが持っているスタンドはディアボロはすぐに理解できた。

「（あれば、ホルス神か。氷を使うスタンドだが……スタンドは単純なほど強いのが多い。あのスタンドも厄介だな。だが）俺の名はディアボロ。以後よろしく頼む」

ディアボロはそう言つとチルノにお辞儀をした。

「うん！よろしくねディアボロおじちゃん」

「（お、おじちゃんだと！？このディアボロが……おじちゃん呼ばわりされるだとあ！？）」

ディアボロはおじちゃんといわれて内心かなりショックを受けていたがチルノが気づくはずもなかつた。

そして、ディアボロが言われたショックで死に掛けたことも知るはずがない。

しかし、そんなことを考えている暇は無かつた。

チルノが手から弾幕を撃つてきたからだ。

ディアボロはそれをエピタフの未来予知で少しは見ていたのでよける。

よけきれないものはキング・クリムゾンではじいたりしている。

「む～、冰符「アイシクルフォール」！」

すると、チルノがたくさんの氷の弾幕をディアボロに向かつて撃つてきた。

ディアボロは弾幕をよけながら様子を見る。

すると、真ん中に攻撃の隙ができるのを見つけた。

「（よし、あそこに行けば……いやちょっと待てよ！？）

ディアボロは真ん中に行こうとしたがすぐにそれをやめた。

そしてその直後に巨大なツララが弾幕の無い場所を貫いた。

ディアボロはやはりと思ったが今弾幕の嵐の中にいる。

今は何とかよけれているが空が飛べない分それを続けるとは思えない。

だが、ここは森の中である。

だから、ディアボロはキング・クリムゾンの脚力で飛び上がった。そして弾幕をキング・クリムゾンではじきながら木の幹の上に着地した。

そして、

「キング・クリムゾン！」

キング・クリムゾンを発動した。

ディアボロは木の幹を蹴つてチルノの背後の木に移動するとその木の幹を蹴つてチルノの背中に行き、頭部をキング・クリムゾンで殴つた。

「時は再始動する」

すると、時が再び元に戻つてチルノは地面に殴られた勢いで叩き落された。

しかし、ディアボロはある違和感を感じた。

それは、DISCが頭部を殴つたのに出でこなかつたことである。そして、ディアボロの拳からは血が出ていた。

いくら力が弱つたキング・クリムゾンでも拳で殴つたぐらいでは地が出ることは無い。

「（あいつがそこまで硬いとも考えられん。そうなると・・・まさか）」

ディアボロはチルノの落ちた地面を見た。

すると、その地面は凍りついていた。

そしてその真ん中には・・・奇妙なスーツのようなものを着たチルノがいた。

「へつへーー！やるね、けどまだまだたいには勝てないよー！」

ディアボロはそれを見ると顔をしかめた。

チルノが使つてゐる、もう一つ（・・・）のスタンドはディアボロがよく知つてゐるスタンドの一つ・・・

「ホワイト・アルバムか。・・・コイツは厄介だな」

ディアボロはそうつぶやくと背後からキング・クリムゾンをしまつ

ゴールド・エクスペリエンス
てGEを出した。

そしてさつき事前に拾つておいた小石を蛙に変えるとそれをチルノに投げつけた。

チルノはそれを見るとうれしそうに手を広げて、
「凍っちゃえ！」

ホワイト・アルバムの能力で凍らせた。

さつきの蛙はホワイトアルバムのいる距離から多少離れた場所で作つていた。

そしてどうやら散るのはホワイト・アルバムの真の恐ろしさに気づいていないようだ。

さつき凍らせてしまつたのは、『ゴールド・エクスペリエンスが作った蛙。

といつ』とは、もちろんダメージは跳ね返る。

突然、チルノ自身に激痛が走つた。

「くあつ！？」

ディアボロはそれを見るとチルノに近づき首下にある空氣穴をキング・クリムゾンが指で・・・突き刺した。

チルノはかなりの痛みを感じていた。

そして、ディアボロは力をためて、

「キング・クリムゾンッッ！」

チルノの頭部を殴つた。

するとチルノ自身にダメージが来ているせいかホワイト・アルバムにひびが入つた。

ディアボロはそれを見るとそこにラッシュを仕掛けた。

そして、そこは見る見るうちにひび割れていき・・・最後にキング・

クリムゾンの拳はチルノの頭部を碎いた。

チルノは頭からDISCが一つ出るとそのまま地面に倒れた。

ディアボロは体力を消費したのか息切れをしている。

「はあ・・・はあ・・・」これで勝ちだな

ディアボロはDISCを拾うとその一つを頭に差し込んだ。

するとそのDISCはディアボロの頭の中に入つていつた。

ディアボロはチルノの方を見た。

どう見ても頭部が碎かれていることで死んでいると思つた。

しかし、次の瞬間ディアボロは信じられない光景を見る。

チルノの死体が消えると・・そこに無傷のチルノが突然現れた。

「何つ！？」

「・・・悔しい・負けちゃつた」

チルノのほうは負けたのを残念がつてゐるようだ。

ディアボロはそれよりもチルノがよみがえつたことに驚いた。

・・・もつとも、ディアボロも同じようなものだが。

ディアボロは、とにかく今はここに住んでいる生き物の探索よりもDISCの回収を急がせることにした。

ディアボロはそのままこの場から立ち去りつとした・・・が、チルノに呼び止められた。

「あんた強いね！けど、今度は負けないから！」

チルノはそう言つてディアボロに手を差し出した。

正直次は無いと思つただがな、とディアボロは思つていたがとりあえずチルノの手を握つて握手をした。

その手は、思つていたより小さく・・・冷たかつたがぬくもりがあつた。

ディアボロはこう考へると今まで生き物と意思を共有したり触れたりすることが無かつたと思つた。

実際、パッシュヨーネのときもそのようなことはあまりなかつたしする気もなかつた。

しかし、今となつては・・・そつこつのも悪くないかもなと思つてしまつ。

それがいい事なのか悪いことなのかは知らないが・・・少なからず、いやなものではない・・・ディアボロはそう思つていた。

ディアボロはしばらくするとチルノと分かれて森の中を歩いていつた。

おそらく運がよければまた会えるだろう。

ディアボロはそう思いながら歩いていた。

・・・のだが、思いふけつていたせいか注意力が足りなかつた。

「ぶみつ！？」

突如、空から降りてきた少女に、ディアボロは踏まれてしまった。

その少女は正確には降りてきたのではなく落ちてきたらしいのだが・

・・今のディアボロが知るよしは無い。

ディアボロは・・・そのまま倒れて死んでしまつた。

今日のディアボロ 空から落ちてきた少女に踏まれて死亡

ディアボロ、スタンドバトルをする（後書き）

今回はバトル事態はあまり大きな展開はありませんでした。
実のところチルノがスタンドを使いこなせなかつたというのが大きな点ですね。

実は書いている途中でもし咲夜がDIOの娘だつたらで、スターダスト・クルセイズのときに咲夜がDIOに会いに行つたらという感じで考えていたら、DIOが咲夜を操つて承太郎たちに戦わせるという図が生まれました。

ちなみにスタンドは見えます。

なぜ見えるかという詳しい設定は考えていますが今は（といつか小說にするかすら謎だけど）書きません。
それでは次回まで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7397x/>

ディアボロは非日常な日常に投げ込まれる！

2011年11月11日18時53分発行